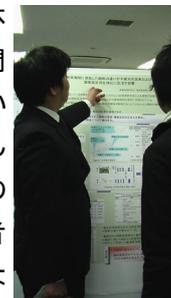


卒論・修論発表

年が明けて早くも2月になりました。2月は研究室にとって一番忙しい時期かもしれません。4回生、修士2回生は卒業論文の作成、発表に大忙しですし、それを指導する先生方もそうです。今年も例年通り、卒業論文の締め切り前は、みんな土日返上、徹夜でがんばってましたね。修士は応用生物専攻で修士論文発表会があり、今年は椎野君、竹内さんが発表しました。2人とも教授陣の前での発表だったので、いつもより緊張してました。でも、発表、質疑応答ともスムーズだったので、さすがです。修士論文発表会で驚いたのは、育種の学生のほとんどが別の研究室の発表を聞いていたことです。僕らの研究室の発表時間は午後からだったのですが、育種の学生は午前からずっといるとのこと、特に先生から指示された



わけではないそうです。それを聞いて、心構えが違ふなあと感じ、また反省しました。4回生は今年から卒論発表のシステムが大きく変わりました。昨年までは、研究室内での発表のみだったのですが、今年からは学科全体でのポスター発表になりました。学科全体での発表になると、全然専門分野の違う人にも説明しないといけない上に、今まで発表したことのないポスター形式での発表ということもあり、発表者である柳君、中川さんはもとより、先生方にも戸惑いがあったと思います。発表形式の変更で、発表者の人はしんどかったかもしれませんが、発表を聞きに行く人はいろんな分野の発表が聞けていいかもしれませんね。来年以降、果たしてこの形式での発表が続いていくのでしょうか。とにかく、椎野君、竹内さん、柳君、中川さん、お疲れ様でした！卒業旅行楽しんでください。（記者N）



目次:

～広岡先生の随筆～ @FDIについて考える	2
打ち上げ	3
吉田神社の節分祭	3
春の日本畜産学会	3
The warm heart of 4 Africa	
お勧め図書	4
お知らせ	5

2月とは思えないような暖かい日が続きましたね。アメリカから帰国した途端、友人の結婚話が2つも飛び込んできました。季節も気持ちも春めきます♡。3月に入って、全国的にももう春なのかなと思ったら、福島県はまだまだ日中も寒く、室内にいてもぞくぞくする感じです。環境に優しい省エネルギーと快適空間（暖房）は、その線引きが難しいところですね。人によっても快適温度が違います。室内の設定温度が低い場合には、風邪を引かないように自己防衛を心がけています。

後期入学試験

1月23日、大学院の後期入学試験が行われました。今回の試験で、新たに(?)2人の学生が研究室にやってくることになりました。1人は、イクバルさんと同郷であるインドネシアからやって来たチ子さん、もう一人は3回目の受験でついに合格した酒井君です。これで、4月から4回生が4人、修士1回生が6人になり、今までにないくらいの大人数になります。若い

人の割合が増えて、にぎやかになりそうで楽しみです。

ここで、念願の合格を果たした酒井君に修士になる意気込みを聞きました。

酒井「挑戦する気持ちを忘れずに研究に励みます！皆さん、ご心配をおかけしました。」

（記者N）

好評連載 広岡先生の随筆

⑩FDについて考える

さる11月25日にFDワークショップなるものが農学部で開催された。原則全員参加と言うことなので、われわれの研究室も教員は全員参加したのではないかと思う。FDと言うのはフロッピーディスクのことではなく、Faculty Developmentの略で、教員が授業の内容、方法を改善し、向上させるための組織的な取り組みの総称だそうである。このワークショップ自体は、とても参考になり、おもしろいものであった。



FDの取り組みは、京都大学で話題になるのは最近のことだが、私立大学などではずっと以前から取り組まれてきた。しかし、私はこの取り組みには前任校の当時から、ずっと消極的で懐疑的であった。その理由は、対象となる問題の解決策は明らかで、アホくさく、茶番劇につきあうのはいやだったからである。

現在の大学教育の最大の問題点は、学生が勉強しないことである。したがって、FDの目的は、いかに学生が興味を持って勉強するように仕向けるかである。そのため、多くの大学では、FDに真剣に取り組み、知恵を絞り、汗をかいてその目的達成のために頑張っている。実際、それまで勉強したこともない学生を数多く抱えているような大学では、いかに工夫して芸人ふうな学生に講義を聞かすようにすることは重要な課題であろう。しかし、ある程度の有名私立や国立大学法人においては、問題解決の手段は明らかである。

その解決法とは、ズバリ、アメリカの大学のように講義の後にわんさか宿題を出し、単位の認定を厳しくして、学生が勉強せざるをえないようにすることである。教員が汗をかいて考えるFDでは問題の解決はせいぜい10%で、残りの90%は学生が汗をかくことではじめて解決することである。事実、単位認定の基準は、講義時間と同じ分の予習復習を学生が行うことが前提である。その点をまったく議論せず、いかに講義を学生に楽しいものにするかに論点をのせたFDの取り組みは、滑稽を通り過ぎて喜劇にさえ感じてしまう。

それではなぜ学生に汗をかかすことができないのか。この点を考えれば、見えないものが見えてくる。まず、第1の理由は、そのような厳しい講義、苦勞する講義は、学生たちに敬遠され、大きな講義室に数人の受講生という散々たるものになるからである。京都大学の学生であっても、このような講義を積極的に取ろうとする学生は全体の数%であろう。私立大学であれば、このような実践を行っている教員は、経営的に非効率という理由で、事務から叱られるであろう。したがって、このような方式の講義を実現するためには、すべての講義をこの方針に転換せざるをえないのである。さらに、もっと深く考えれば、第2の理由は、もし学生が真剣に講義を聞き、勉学に励むようになれば、学生はアルバイトをしなくなり、企業が若く安価な労働力を失うことになるからである。このような事態になれば、日本中の経済は大変な事態に直面することになる。うがってみれば、このような事態になることが分かっているから、ピントの外れた形だけのFDをあえてみんなで議論しているのかもしれない。そう考えれば、為政者はすこぶる賢明である。

最近、この種のピントの外れた強制に近いようなお達しが政府から来ることが多い。たとえば、メタボに代表される健康管理の議論もそうだが、表面的には国民の健康に気遣っているように見えるが、それなら最初にまず着手すべきは、タバコ一箱を1000円にすることであろう。JTか国民かどちらを大切と思っているのかと疑ってしまう。また、司法に対する国民の信頼の向上をめざすのであれば、罰金まで課して強制的に裁判員にさせようとするのはなぜなのであろう。このような中、いつも馬鹿を見るのはまじめに問題解決に取り組もうとしている現場の人々である。このような馬鹿げた茶番劇に付き合わずにすむためには、物事の本質を見抜く力を身につけることが重要で、そのような教育もまた大学の責務なのかもしれない。

打ち上げ

2月中旬、卒業論文発表の打ち上げを広岡先生のお気に入りのお店である「ヤンパオ」で行いました。「ヤンパオは店員がかわいいだけでなく、ノリもいいんでお勧めですよ」(by C命)。研究室の打ち上げをヤンパオで行うのは約1年半ぶりでしたが、以前よりかなり狭く感じました。研究室のメンバーがかなり増えたからですかね。先生方をはじめ、畜産資源にはお酒を飲む人が多いので、(主要メンバーが1人欠席でしたが)お酒の注文が絶えず続くくらい盛り上がりました。あと、ヤンパオの代名詞(?)である「マンガ肉」も堪能しました。1次



会が終わり、いつもの飲みメンバーで近くのたる八で2次会をやることにしたのですが、そこで偶然にも生殖の人たちが飲み会をしていたので、急遽、合同で飲むことになりました。最近、はくび会以外の場で他の研究室の人たちと飲むことが少なくなっていたので、すごく楽しかったです。普段会わない人と話せる機会は必要だと思いますし、引越して動物系の研究室が近くなるので、ちょくちょく他の研究室の人とも飲み会をやりましょう!



(記者N)

コラム: 一言一考⑫
「自信」

自らを信じる力のこと。他者の評価はなくとも持てる自信が本物である。プライドというあまり感じが良くないが、この言葉は、自己防衛や他者批判に使う誇りのことをいうのではないだろうか。要は使い方、活かし方である。自信は自ら成長して生き抜くことができると思う気持ちであり、それを信じる力である。

(明太子)

春の日本畜産学会

いよいよ学会シーズン到来です。日本畜産学会第110回大会は、3月27日(金)から29日(日)の日程で、神奈川県藤沢市日本大学生物資源科学部において開催されます。

今回の日本畜産学会大会では、畜産資源から以下の発表が行われる予定です(演者とタイトルのみ)。大石先生「性判別技術や双子生産技術の導入が黒毛和種繁殖生産の経済性に及ぼす影響」、長命さん「肉牛経営における稲発酵粗飼料導入の効果と課題」、西尾くん「少数の遺伝子情報が利用できる場合の遺伝的能力評価簡便法の検討」、椎野くん「ネパール国タライ地域における地場産飼料のヤギに対するみかけの消化率および窒素出納」

吉田神社の節分祭

2月2~4日にかけて大学すぐ横の吉田神社で節分祭が行われました。

今回は畜資ホットブラザーズで祭りに行ってきました。

室町時代から行われているこのお祭りは出店がたくさん出ます。

おすすめはなんと言ってもお酒の出店。

毎年同じ場所でやっていて、なかなかおいしいです。

枺酒がお勧め。器持ち帰れます。

あとは、なぜ今なのかかわからない年越しソバ。

一昨年は混んでいてあきらめたのですが、今年はしっかり食べました。

わさびがきいていておいしいです。これも食べてみる価値あり。

そして、極めつけは福引!!

200円で1回福を引け、大当たりでは車やハイビジョンテレビがあたります。

あたらなくても福引券を買うときに福女から福豆もらえるので

ほくほくです。

あと、今年は芋や、シシカバブや、大判焼きや、、、色々な店が出ていたなあ。

あれ?お参りは??

。。。。。

まあ、よいでしょう。



みなさんにも鬼は外、福は内。

よき年になりますように。

匿名記者



The warm heart of Africa

日本政府から委託されている一事業として独立行政法人国際協力機構(JICA)が、青年海外協力隊の派遣を行っています。協力隊の派遣期間は2年間となっており、現在、年4回派遣を行っています。職種は約100種類にも及んでおり、私は2005年4月からアフリカのマラウイ共和国で、人工授精の普及活動を2年間に渡って行いました。

今回は、派遣されていた国「マラウイ共和国」について紹介します。

ウォーム・ハート・オブ・アフリカと呼ばれる国マラウイは、アフリカの南東部に位置し、日本の滋賀県と同じように、海に面しておらず、湖(マラウイ湖)が国土の約3分の1を占めています。標高約1,100mの高地で、国土面積はちょうど北海道と九州を合わせた大きさがあり、とても縦長な形をしています。涼しい乾期(5月～8月)・暑い乾期(9月～10月)・雨季(11月～4月)の3つの気候があり、1年を通して日本よりも過ごしやすい気候のため、私は目立った病気もせずに生活することができました。



マラウイアン主食はトウモロコシの粉をお湯で練ったシマ(Nshima)と呼ばれるもので、カボチャなどの葉っぱをトマトで煮込んだものにつけて食べています。牛肉、鶏肉、干し魚、卵



を使用した料理も食卓に並べられることがありますが、これらはご馳走で一般家庭ではめったに食べられるものではありません。また、彼らの食事にはバリエーションが少なく、味付けは少々油と塩で整えただけで、とても

あっさりな味が印象的でした。協力隊や他国のボランティアの指導により、米が出回るようにはなりましたが、細かい作業が嫌いなマラウイアンが販売する米は、砂利を取り除ききれない場合が多く、噛む度に残念な気持ちになります。そのため、必然的に僕の主食もシマになりました。アフリカというと飢餓で苦しむ人々のイメージがありますが、少なくとも私のところでは実際にそんな人は見られず、村の子供たちもきちんと3食食べていました。

住居は、釘やネジを一切使用せずに建てられており、萱(かや)とビニールシートを交互に重ね、蔓(つる)で縛って屋根にしています。壁は粘土、あるいはレンガで固められています。どの家も円形の穀物倉庫、萱で囲っただけのバスルーム、土壁の小屋のトイレを持ち、野生のバナナやマンゴーの木が敷地内に生えています。



マラウイアンは、ゆっくりゆったり先の急がず、くよくよせず、細かいところは気に止めず、働きすぎず、でもどんなに苦しくても笑顔を忘れずに、いつまでも大地を踏みしめていく、まさに「牛」のような国民性を持っています。

このような国民が決してあきらめもせず、遅々とはしているが改善に向かって、少しでも多くのアイデアを吸収しようとする意気込みが感じられました。

私が小さい頃から憧れていたアフリカ大陸にある小さな国「マラウイ共和国」で、広い広い大空のもと、みんながこの国の発展を願っているなか、協力隊員として派遣され、形にはならないけれども、畜産の発展に少しでも寄与できたという自負と、活動を無事に終えられた事を感謝しています。

(酒井)

お勧め図書

『英語のソーシャルスキル』

Politeness Systems in English and Japanese.
鶴田庸子/ポール・ロシター/ティム・クルトン 共著
大修館書店 1988/1/10年初版 価格 1470円
ISBN:9784469241006

昨年11月に遡りますが、恩師渡邊昭三先生から個人講義を受けるという名誉な出来事がありました。そのとき、渡邊先生から頂いたのがこの本です。

渡邊先生は、東京大学から農林水産省へお進みになり、後年には鹿児島大学教授を勤められました。時期を同じくし

てILCA(アフリカ国際畜産センター)の理事を兼任され、世界を舞台に今も活躍を続けていらっしゃいます(ちなみに昨年アジア大洋州畜産学会議では、総合講演を勤められました)。

国際社会で仕事をする機会があるなら必読です。留学や旅行などで海外へ行く場合は、「通じる英語」で充分ですが、社会的な立場を携えて行動する場合は、言葉のマナーや会話のマナー、果ては身だしなみや立ち振る舞いによって、相手に与える印象が大きく異なります。公私がはっきり分かれる西洋社会で恥をかかないため、対等に仕事をするためのノウハウや英語表現が満載です。

(ようこ)

Department of Animal Husbandry
Resources, Kyoto University,
Faculty of Agriculture
Oiwakekyo, Kitashirakawa,
Sakyo-ku Kyoto 606-8502 Japan

Tel: (+81)-75-753-6363

Fax: (+81)-75-753-6373

http://www.animprod.kais.kyoto-u.ac.jp/

GOAT BULLETIN



GOAT BULLETINは、皆様の投稿記事で成り立っています。形式・文字数は問いません。また、読者の方々からのご意見やお問い合わせも受付中です。下記のアドレスまで送信してください。

E-mail: yoko3t@kais.kyoto-u.ac.jp

お知らせ

今月のゼミ

今月のゼミは、お休みです。また来年度お会いしましょう！来年度のゼミ予定が決まり次第ご連絡します。
ゼミ係り

研究室の動向

3月2～6日の日程で、塚原さんが昨年秋に実施されたアフリカ人を対象とした山羊研修の最終評価会で、福島（独）家畜改良センターへ出かけています。3月10日（火）は、3回目となる研究室のお引越し（本移転）です。仮移転で転々としてしまいましたが、やっと畜資にも安住の地が訪れます。午前11時から全部屋一斉移動となります。皆さん、くれぐれもご準備を。3月17日から熊谷先生がネパールへ出張されます。中旬には、新留学生のチチさんが日本での生活準備に入ります。早く日本の生活に馴染めるように、皆さんお手伝いをよろしくお願ひします。月末は、日本畜産学会と各研究会です（詳細は本文を）。

はくび会送別会

毎年恒例の「はくび会総会・卒業生送別会」が開催されます♪
3月23日（月）午後3時からで、場所は未定とのことです。総会では、今年度の事業や予算についての報告と、来年度の事業計画が話し合われます。その後の送別会では、日頃なかなか交流が持てない動物系の他の研究室の皆さんとの楽しいひと時が待っています。卒業生の艶やかな振袖姿や袴姿も楽しみです～☆

2009年 3月の飼育当番表

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4 児嶋・柳 体重測定Ⓞ	5	6	7
8	9	10	11 木村・西尾 体重測定Ⓞ	12	13	14
15	16	17	18 田端・イクバル 体重測定Ⓞ	19	20	21
22	23	24	25 酒井・スリタヤニ 体重測定Ⓞ	26	27	28
29	30	31				

編集後記 平成20年度はあまり好印象でないまま幕を閉じそうです。世界的な金融危機、自然災害の増加と環境問題、国内では、今までになくひどい政治不信、モンスター○○などに代表される利己的な人々の台頭、猟奇的犯罪の多発、麻薬やエイズの氾濫…京都大学からも不名誉なニュースが発信されました。個人主義や自由主義を楯に取った、ゆがんだ意識が諸悪の根源につながっている気がします。国民の団結と協調を説いてアメリカの希望となったオバマ大統領が輝いて見えるのは私だけでしょうか…？